終戦後 秋田で墜落のB29
富山大空襲に出撃



富山大空襲に出撃したB29の主脚。秋田県の本山に今も残されている＝7月下旬、同県男鹿市

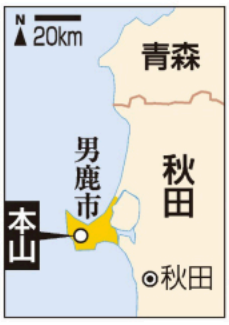
終戦直後に秋田県男鹿市の本山（715メートル）に墜落し、昨年までに山中から機体の一部が見つかった米軍B29爆撃機＝Q＝が、1945年8月の富山大空襲に出撃していたことが分かった。機体を発見した秋田市の探検家、高橋大輔さん（59）が米軍資料を調べて確認した。81年前の悲惨な歴史を今に残す貴重な遺産として「富山の人々にも広く知ってもらいたい」と話す。【関連記事33面】

本山に墜落したB29は1945年8月28日、秋田県大館市にあった連合国軍の捕虜収容所へ救援物資を運ぶ際、濃霧の影響で中腹の斜面に衝突、炎上したとされる。米軍の乗組員12人のうち11人が死亡し、生き残った1人が地元集落の住民によって助け出された。

機体の一部が山中に残ることは知られていたが、正確な場所などは分かっていなかった。高橋さんは2019年、男鹿市内の知人から相談を受け捜索を始めた。24年12月、墜落したとみられる地点付近で、後に油圧パイプと分かる金属片を発見。「ピトー管」と呼ばれる飛行速度の計測機器も見つけ、25年6月に主翼を支える着陸装置である全長184センチの主脚を探し当てた。主脚は鉄製でかなりの重量があり、現場に置かれたままとなっている。

高橋さんはこのB29の乗組員の名前から、米国立公文書館が所蔵する「未帰還機乗組員報告書」と照らし合わせ、機体のシリアルナンバーを入手。そこから研究者の協力を得て出撃記録をたどったところ、1945年8月2日未明に起きた富山大空襲に出撃していたことが分かった。富山をはじめ、同年4～8月に大阪や愛知、静岡などへ少なくとも10回出撃していたことも明らかになったという。

高橋さんは、これらの出撃のうち、約11万人が被災し、2700人超が亡くなった富山大空襲が最も被害が大きいと説明。米軍は富山市の中心部を174機のB29で攻撃したとされる。「悲劇をもたらしたB29の1機がいまだに存在するという事実は、富山の人々にとって大きな意味合いを持つだろう。富山を含めた全国規模で、この戦争遺跡を後世につないでいくきっかけにしたい」と語った。



戦後81年

機体の一部発見 探検家 高橋さん
米資料で確認

Q ズーム

B29爆撃機　第2次世界大戦中に米国のボーイング社が開発した、長距離飛行が可能な戦略爆撃機。全長30メートル、全幅43メートルで、高度1万メートル超を高速飛行できた。大量の爆弾を積み込め、「超空の要塞（ようさい）」と呼ばれた。広島と長崎への原爆投下をはじめ、富山など日本各地での空襲に使われた。

唯一の生存者 空襲参加
形見の飛行服に「TOYAMA」

本山に墜落したB29で唯一の生存者だった故ノーマン・マーチンさんは当時19歳で、富山大空襲にも参加していた。高橋さんが昨年、機体の一部の発見を伝えるために米国でマーチンさんの娘と面会した際、形見のフライトスーツ（飛行服）に任務地として「TOYAMA」の文字が記されていた。

マーチンさんは本山近くの加茂青砂集落の住民に救出された後、手当てを受けて帰国。1990年には地元の招きで男鹿市を訪れ、命の恩人らと再会した。一連の出来事は現地で日米友好の象徴として知られる。

集落の住民は、亡くなった乗組員11人の遺体も収容した。本山の頂上付近と集落には彼らの慰霊碑が3基あり、現在も毎年8月に慰霊祭が営まれている。